留学を終えて

岐阜東高等学校　北村　彩矢音（ニュージーランド）

私は、ニュージーランドの高校に１年間留学しました。

１年間の留学で感じたことは、「留学することが大切」ではなくて、「留学して何を学ぶかが大切」だという事です。留学と言っても内容は様々で、海外の学校に通っていれば、留学していることになります。時間が過ぎるのを待ちながら授業を受けても、集中して授業を聞いても、留学していることになります。

私は留学して１週間が過ぎた時、充実した留学生活を送ろうと思いました。そうでないと温かい言葉と共に送り出してくださった先生方に１年後、笑顔で再会することができないと思ったからです。私が海外で遊んで暮らしてしまったとしたら、日本で勉強を頑張っている友達に申し訳なくて合わせる顔がありません。そして、１年間遊んでしまった自分を恥ずかしく感じるだろう、とも思いました。

私は、入学初日の科目選択で数学、物理、音楽、留学生のための英語と科学を選択しました。英語と科学は、留学生用だったため、そんなに苦労することはありませんでしたが、その他の授業は、ネイティブと同じ事を学ぶため、いろいろな面において難しかったです。しかし、数学と物理においては、難しい問題が解けた時は、とても充実感がありました。授業中は、辞書を使うことが許されているので、授業内容を理解することができましたが、試験は辞書の使用が禁止されているため、説明を求められる問題では満足できる点数を取ることはできませんでした。しかし私は数学と物理の授業が楽しくて大好きでした。数学の授業は必須だったため、同じクラスに２人の留学生がいましたが、物理は私の他に留学生がいなかったので初めは不安でしたが、その分、クラスメートがたくさん話しかけてくれて、仲良くなることができました。日本のアニメのグッズを持っていたら、現地のアニメ好きの子が話しかけてくれ、次の日にはその子の友達が話しかけてくれ、次第に友達が増えていきました。私が分からない問題は、また別の友達が教えてくれて、友達にはとても恵まれました。先生も、「英語での授業は難しいだろうけど、一生懸命取り組んでいるね。その調子で頑張って」と励ましの言葉をかけてくれました。物理の宿題は楽しくて、真っ先に取り組みました。

しかし、私にとって音楽の授業は一番難しく大変でした。音楽は楽しいイメージがありましたが、音楽好きが集まった音楽の授業は、楽しいだけではありませんでした。まず驚いたのが、２曲作曲しなければいけない、ということでした。作曲なんてやったこともないし、やり方も分かりませんでした。そこで慌てて電子ピアノを購入しました。新品を買う金銭的余裕がなかったので、中古を探そうとしました。しかし、どのように探せば良いか全く検討がつきませんでした。ホストファミリーに相談したら、中古品を扱っているサイトを教えてくれました。そうやってひとつひとつ現地のやり方を覚えていきました。日本だったら、そんなに難しい事ではなくても、知らない土地では全てが難しく、かつ新鮮でした。なんとか生まれて初めての作曲を終えたら、次は、もっと大きな課題が待っていました。ベートーベンのピアノ協奏曲の分析です。「ソナタ形式の定義とこの曲における活用」という問題から始まり、日本語でもよく分からない提示部・展開部・再現部の説明を英語でしなければなりませんでした。オーケストラの知識も全くありません。その途中、動機、主題、同主調、持続低音など専門的な用語もたくさん出てきました。それら全ての定義と活用例につ

いて理解し、自分の言葉で表さなくてはいけませんでした。辞書で調べても、音楽用語としての意味は簡単には出てきませんでした。何度も投げだそうと思いました。提出するのをやめようとも思いました。何が何だか全く分かりませんでした。それでも様々な資料を見ながら、1ヶ月かけて締め切りまでになんとか提出することができました。きっと間違いだらけの英文で、間違いだらけの分析結果だったと思います。しかし、その分析結果を提出した後、音楽の先生は私にとても優しく接してくれました。「完璧ではないけれど、この分析に前向きに取り組んだことがよく分かります。言葉の壁はなかなか越えることはできませんが、この努力を高く評価します」と言ってくれました。それを聞いた瞬間、最後までやり遂げて良かった！と心の底から思いました。後に、歌の実技のテストがあったのですが、歌い終わった後、何人かのクラスメートが「良かったよ」と言ってくれて、先生からは「この高校は合唱に力を入れているから、あなたみたいな人に合唱部に入ってほしい」とうれしい言葉をいただきました。とても大変な音楽の授業でしたが、充実している授業でもありました。

留学して８ヶ月目の１１月初め、ニュージーランドの高校は３ヶ月の夏休みを迎えることとなりました。現地の高校生は１２月に行われる全国統一テストと言われる国家資格のようなテストのために忙しく勉強しますが、1年間の留学生にはそのテストを受けることが許されていませんでした。１００名程いる留学生のほとんどがそれぞれの母国へ帰りました。私も日本に帰って、日本食を楽しんで、友達に久しぶりに会って遊びたかったし、買い物にも出かけたいし、日本を思う存分満喫したかったです。しかし、考え直しました。もう半年もしないうちに日本を満喫できるのだから、今しかできないことをしようと思いました。

クリスマス休暇までの６週間、大学付属の語学学校に通いました。そこには大学生や大人の日本人がたくさんいました。しかし、私は他の国のクラスメートと英語で話すように心がけました。日本人を避けていた訳ではありませんが、全員年上だったので、日本語を敬語で話すよりも、他の国のクラスメートと英語で話している方が、気が楽でした。

ある日本人の大学生が言いました。「学校に通っているだけでは英語は話せるようにならない」と。その通りだと思います。通っているだけでは英語は話せるようになりません。使わないと話せるようにならないし、積極的に話さないと身にはつきません。私は高校生なので間違っても当たり前！と思っている分、他の日本人より英語で話しかけることに抵抗がありませんでした。

その語学学校では、英語の文法を英語で教えてもらいました。これは、現地の高校では教えてもらえなかった事です。英語での授業でしたが、とてもわかりやすかったです。私は岐阜東高校で1年間しか英語を勉強していません。そのため、文法は分からないものが多いし単語力もありません。文法と単語を知っているだけでは英語は話せるようになりませんが、それらを知っているだけで表現の幅が大きく広がります。相手が伝えようとするニュアンスの違いにも気づくことができます。文法は英語の規則みたいなもので、文法を理解している方が、自分が言いたいことをより多く伝えることができます。文法を間違えても理解してもらえますが、文法を知っている方が、明らかにたくさんの会話が楽しめます。私は岐阜東高校に復学したら、英語の授業に真剣に取り組みたいです。そして知らない文法をきちんと覚えたいです。この６週間で文法と語彙の重要さを学びました。

年が明けて高校が始まるまでの３週間、別の語学学校に通いました。他の語学学校の勉強方法も

知りたいと思ったからです。その語学学校はとても小規模で、日本人には知られていませんでした。アジア人も一人もいませんでした。クラスメートは、ブラジル人やヨーロッパ人で、現地で仕事をしている人や現地での専門職を目指している人たちでした。彼らはとにかくよく喋ります。何でも喋ります。そして好奇心も旺盛でした。そして、現地での仕事を得るため、勉強に対する姿勢は真剣で、一つでも多く学びたいという気持ちが前面に出ていました。私も彼らに影響されて、学ぶことが楽しいと思いました。勉強に前向きなクラスメートに囲まれて、私ももっともっとたくさんの知識を学びたいと思いました。

高校の新学期が始まると新しい教科の勉強も始まりました。私は新たに歴史の授業を取りました。ニュージーランドの歴史と世界の歴史です。たくさんの史実を覚えるというよりは、掘り下げて学びます。ゴールドラッシュの時代、ある都市が栄えると同時に発生した問題などを学びました。人頭税という言葉を知ったのもその授業内でした。中国人の金鉱掘りは、祖国で豊かな生活をするために海を渡ってニュージーランドに来たにも関わらず、十分なお金を持って帰ることができず、差別的な扱いをされたことも習いました。チャイナタウンはどのような理由で作られることになったか。それは良かったことかどうかの意見を言い合いました。授業も資料も全て英語なので、少しでも多く理解するために予習は欠かせませんでした。また世界の歴史ではカンボジアのポルポト政権について学びました。恐ろしい事実で、目を背けたいことではあるけれど、知らなければいけないことのようにも感じました。

高校での授業は難しいけれど、知る楽しさを感じられるものばかりでした。

長いようであっという間だった１年。異文化を感じ、それを楽しみ、高校生の本業である学業にも一所懸命取り組みました。とても充実した留学生活が送れたと思っています。

たくさんの人のおかげで今の自分があることを忘れず、感謝の心を持ち続けたいと思います。